

草原の昔と今

「九州の屋根」として知られるくじゅう連山は、平均標高は 1700m で、全九州（中岳は 1791m）で一番高い山頂を有しています。くじゅう連山は数万年前の火山噴火と地震によって作られ、北部には飯田高原、南には久住高原があります。飯田高原も久住高原も標高 800m 前後の高原で、夏はとても冷涼です。

火山灰や噴火から発生したデブリから作られた飯田・久住の両高原は、広大な草原に覆われています。草原は、牧草地としての利用や草刈り、「野焼き」と呼ばれる意図的な草原の焼き払いなどといった、人間の活動によって積極的に維持されています。このような活動は古くから行われています。この草原の維持活動がなければ、木々が草原に侵入し、森林になることで草原の豊富な自然環境が失われます。

最近では、草原が縮小しています。燃料、放牧、および茅葺としての草の利用が減少したため、このような農業活動により保全されていた草原も失われる危険にあります。地域の人口減少と農地利用の減少に伴い、草原の維持活動も縮小してしまいました。今日では、草原の保全と再生はボランティア募集プログラムによって行われ、周辺の街からやってくる多くのボランティアが阿蘇くじゅうで毎年の春の焼き活動に参加しています。